激動の2017年決戦へ！
全学連（斎藤郁真委員長） 書記局通信
2016年12月20日
No.432
Tel　03-3651-4861
mail_cn001@zengakuren.jp
http://www.zengakuren.jp/

全学連拡大中央委員会での京大生Bさんアピール！

全学連大会に行って、今まで私がやってきた活動なんかを見て、総括して、今後どういうことをしたいのかという話をしたいなと思います。

私が寮でずっと問われていたのは、「どういう寮にしたいのか」、「これから何を大事にしていくのか」がずっと問われたいたなと思ってます。大学との交渉に、「被処分者は出られません」と大学から言われていたりだとか、寮祭で「時計台に上るな」と言われたりしました。処分者を排除してでも交渉を続ける寮なのか、それとも、全ての寮生との信頼関係を大事にする寮にしたいのか。なんの為に寮自治をしているのかが、具体的に問われた半年だったなと思います。その中で寮生が一致団結して、「処分者も交渉に参加させるんだ」と決めて、ほとんどの寮生が協力する形で、覆面で参加をしました。参加した寮生含め、すごく楽しかったし、良かったと言えた交渉だし、一個一個の闘いが出来たのは良かったなと思っています。

新樹寮の廃寮化阻止闘争の時に、闘っていた方が熊野寮に来てくれて、寮生とか全学連含め、新樹寮の闘争がどういうものだったのかを話してくれました。私の次に委員長になる学生が、その場に来てくれて、「寮の中で守っていきたいもの」、「熊野寮で明確にしたいことが、一個明確になった」、「新樹の闘いを通して見えてきた」と言っていて、一個一個の積み上げの中で、具体的に何を大事にしていくのかを考えていく上で、大事な闘いだったなと思っています。

京都大学全体の自治に関して言うと、特別報告で自治の内容というか、どんな大学にしたいのかという事を、もっともっと豊かに語れる必要があります。寮自治とも一緒で、どんな寮にしたいのか寮生が、主体的に意見を出して行けるからこそ、熊野寮があると思っていて、全学的な規模でそういう事が出来ればいいなと思ってます。特別報告では、「全学ストだ」と書いてありますけども、社会の中で、どういう意味を持っているのか。自分の人生にとって、学生生活がどういうものなのかを語れないと、内容の乏しいストライキになってしまうので、議論はもっともっとしていきたいなと思っています。

議案の中に、看板の写真とかのってましたけど、私と熊野寮の学生がメインで、様々な人たちに手伝ってもらって完成しました。その後、大学当局に一旦破壊されて、もう一回立てました。時計台やクスノキ前は京大の象徴だと思うんですけど、看板を立てていることはすごく大きな意味を持っていると思っています。「学生がいろんなことを言っていいんだ」という事を、示している看板だと思うので、切り開いてきたものは大きいのかなと思ってます。

看板を出すのは「私たちはこう思っていますよ」と伝えているだけで、今の大学の在り方について考えている学生と、議論するとはまだなっていないので、もっとやっていきたいと思っています。

自治会というのは、思っていることを示すのが自治会だし、自治だと思っています。熊野寮でやっていることを京大でやれたらと思っています。一方で誰のための自治なのか。誰のための反戦運動なのかという事は問われると思います。

提起者から、「既得権益を守るというのでは、むしろ分断が生まれるよ」という話があったんですけど、もっと大学に開かれた、社会に開かれた熊野寮というのは、熊野寮の側から提起していかないといけないと思います。

誰のための自治なのか、誰のための反戦なのかが問われるときに、反差別の闘いと一体でやっていかないといけないと思っています。社会の中にいろんな差別があって、差別が内面化しちゃうし、構造として受け入れちゃうという側面はあると思います。誰の為の自治なのと言ったとき、強い人の為の自治じゃないんだと思ってます。

例えば、女性差別を知らないと男性の為の反戦運動、男

性の為の自治活動にしかならないと思います。外国人差別もセクシャルマイノリティへの差別もそうだし、反差別運動をやっていくのは重要だと思っています。以上です。

沖大自治会委員長・赤嶺君発言

僕は沖縄大学で活動しているんですけど、沖縄では大激動が起きています。翁長知事がヘリパッドを容認するという事があって、「負担軽減・基地強化」に応じていって、基地には反対しないと言い続けています。

僕はこれに対して、どう立ち向かうべきかという事を訴えたいと思います。京大での戦争反対の運動であり、ストライキに勇気を貰って京都にきました。ここで話している学生の討論だし、決断に変える力があると、僕は韓国で掴んできたからです。韓国では、何百万という人たちが立ち上がっています。

三条河原にいるような、ありのままの学生が立ち上がっています。ハンサンギュンさんが言っていたんですけど、「社会を変えるのは未来を憂う青年なんだ」と言っているわけですよ。安倍政権を倒すのは、職場や学園の一人一人の決断だし、決意だと思うんです。その所でしか始まっていかないと思うんですよ。

僕が感動したのは、民主労総の闘いを支えてきたものは、「労働者は必ず立ち上がるんだ」という事です。どんな逮捕や処分があっても、労働者を信じて、最後まで資本家と,絶対反対で闘い抜けると思うんです。韓国では、昨年は農民のペクナムギさんが殺されたり、ハンサンギュンさんが20万人規模のデモで投獄されています。その中で、不屈に闘い続ける労働者の決断や、行動こそが韓国の若者の決起を作っています。

ソウル大学の学生がストライキに立ち上がって、「今こそ社会を変える時なんだ」と言って立ち上がっているわけです。韓国の学生は決起しているんですけど、民主労総の闘いの中で、決起していくという事があります。目の前のリンゴだとかではなく、僕らが競争し合わされている、精神をすり減らされている学生に対して、労働者・学生の団結にこそ、力があるんだという事を訴えていく必要があると思うんです。

僕がオール沖縄の裏切りを絶対に許せないと思うのは、人々を分断している。団結破壊だと思うんですよね。翁長知事であり、沖大・仲地学長は新聞なんかで、「ヘリパッド容認・新基地建設は、一旦理解してくれ」、といっているわけですよね。「やんばるの人は不満を持つかもしれないけども、仕方ない」と言っています。最近では、浦添に那覇軍港を増設するという事を決定したわけですよね。ちょうど4年前に、浦添で軍港基地反対の議員が当選したりしました。人々の基地はいらないという、怒りに乗ることで、オール沖縄は一定の力を持ってきたんです。安倍政権が恐れたのは、全基地撤去という怒りが集中するのを恐れていたんです。その怒りを裏切ることは、絶対に許せません。自民党はオール沖縄の解体を狙う中で、「おかしいというのをやめよう」と言っているんですが、オール沖縄こそが、全基地撤去という怒りを、「我慢してくれ」と人々を分断しています。だからこそ、僕らの戦争絶対反対の闘いは変わらないと思います。

最後に訴えたいのは、職場・キャンパスから声を上げて立ち上がることです。僕ら沖大学生自治会は、4年目にして、今年ついに僕と発言してくれる学生が出てきました。週6でバイトしている学生が、こんなのおかしいと、僕らのビラを受け取って立ち上がってくれました。僕らはキャンパスにこだわりぬいて、辺野古新基地建設反対のビラをまき続けました。大学当局は、時には「あいつ等は、辺野古も行かずに、キャンパスに行っている」と、罵詈雑言を浴びせてました。その弾圧してきたやつが、弾圧する一方で、子供も貧困なんだという事を学生に教えています。

その中で、沖大生が週6でバイトせざるを得ない。その現実に対して、しょうがないんだと言っている。

けど僕らのもとに、処分された学生に対して、集会でマイクを持ってくれたりしました。僕らはもっともっとできるはずなんですよ。確信は労働者民衆にこそ、力があると思っています。僕らが訴えている韓国革命だとか、簡潔に訴えていく力をつけながら、変革していくことが重要だと思うんです。

オール沖縄が崩壊して、労働者・学生にこそ力があるという事が、リアルになったと思うんですよ。次のストライキや処分撤回に向けて、自己を厳しく変革しながら、闘っていくことだと思います。沖大からも、ストライキに向けて闘っていこうと思います。ありがとうございました。